

小松の絵馬文化

明暦三年（二六五七）、前田利常に近侍した馬廻役の長屋長五郎・生駒頼母・前田主水の三名は、小松天満宮の御造営に際してそれぞれ一面あて絵馬

を奉納した。また、本折町本光寺では、文化三年（一八〇六）の本堂落慶にあたり、酢屋定清が遷仏供養として奉納した立花を写し取った板絵が伝えられ

ている。大絵馬の奉納は、こうした堂社の造営がひとつの大きな契機となった。

大絵馬の多くは、主に絵馬屋と呼ばれた町絵師や絵心のある職人が担ったが、ときに著名な絵師による作品もみられる。多太神社に伝存する享保元年（二七一六）の白鷹ノ図額は、小松城代に就任して間もない前田修理知頼のもとに就いて、加賀藩の御抱絵師で幕府の表絵師としても活躍した狩野伯円が描いた。また、本折日吉神社では狩野俊信による宝永八年（二七一二）の大森彦七ノ図額が、菟橋神社には土佐派の作と伝える元禄年中の武者絵二面が掲げられている。

十九世紀以降になると、越前福井の絵馬屋・夢楽洞の作品が広く流通した。



飛天ノ図額 上・左額、下・右額(小松市天神町 小松天満宮所蔵)



白鷹ノ図額(小松市上本折町 多太神社所蔵)

この頃から、絵馬の面題は、語り物・芝居に取材したものが主流となった。なかでも「仮名手本忠臣蔵」や佐藤継信・忠信物語の「八島」、さらには地元ゆかりの「勧進帳」などが人気を博した。

それらのなかには、義太夫・浄瑠璃の普及と相俟って、画面に物語の見所となる複数の場面を雲や霞で区切つ



大森彦七ノ図額(小松市本折町 本折日吉神社所蔵)

てコマ割りして描く大作がみられ、「見る絵馬」から「語る絵馬」へと変貌した。また、それらは近代の政治秩序の形成とも深く関わり、忠義を涵養するメディアともなった。

(戸潤幹夫)



仮名手本忠臣蔵ノ図額(小松市月津町 白山神社所蔵)